

「江戸とパリの衛生比較」

江戸の衛生環境は当時の技術や知識の範囲内で、独自の工夫を凝らした衛生管理が行われていました。世界でも人口規模が最大級の都市であり、多くの人々が密集して暮らす中で必要な衛生対策が自然に発展しました。

江戸では木造建築が多く、水や風通しが重要視されました。飲み水や生活排水に利用され、清潔さを保つ工夫も行われました。これは、近代以前の都市では非常に珍しい試みでした。

有名な玉川上水（1654年完成）は江戸の中心部に水を供給するために作られた水路です。また各家庭に井戸が設置され、飲み水や生活用水として利用されました。ただし、井戸が汚染されることもあり、疫病の原因となる場合もありました。

江戸時代では効果的な廃棄物管理が行われていました。これにより、都市環境の清潔さがある程度保たれました。農業が盛んなため、糞尿が肥料として利用されました。町人や農民との間で排泄物を「汲み取る」職業があり、リサイクルされる仕組みができていました。一部の廃棄物（木くずや紙など）は再利用され、余ったものは河川や野外に捨てられました。

さらに現代で言う銭湯が広く普及しており、人々が定期的に体を洗う習慣を持っていました。銭湯が町内のコミュニティとして機能し、人々が清潔さを保つ助けとなりました。

現代の医学知識が全くなかったため、効果的な病気対策ができず、度々疫病が流行しました。江戸後期に流行したコレラや天然痘は死亡率が高く、麻疹（はしか）や梅毒も人口密集地では感染症が広まりやすい状況でした。

一方パリの衛生状態は、歴史を通じてさまざまな課題がありました。特に中世から19世紀後半まで、パリの急速な人口増加や都市化が進むにつれて、深刻な衛生問題が顕著になりました。

パリの街は地面が石畳で覆われておらず、砂や泥が広がり、雨が降れば泥だらけになりました。ゴミや排泄物がそのまま道端に捨てられることが多く、悪臭が漂うことも珍しくありませんでした。市民は窓から道に排泄物や汚物を捨てるのが一般的でした。「ウォーター（水）」と叫びながら捨てる習慣があったと言われています。

パリでは、セーヌ川が主要な水源でした。しかし、川は飲み水だけでなく洗濯や排水にも使われており、同じ水を飲み水として利用するため、非常に不衛生でした。特に感染症の原因ともなっていました。17世紀にはペストが猛威を振るい、パリで多くの人命が奪われました。

フランス皇帝ナポレオン3世の指示で、ジョルジュ＝ウジェーヌ・オスマンオスマン（パリの都市計画家）がパリの大改造を実施し下水道が整備されました。パリ全域にわたる広い下水道網が構築され、狭い路地が広い大通りに刷新され、セーヌ川の水路が整備されました。空気の流れが良くなり、都市環境が劇的に改善しました。